St. Luke's International University Repository

Hope for Support for Mothers of Low Birth Weight Infants in the Process of Rebuilding Their Lives

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 智子, Nagai, Tomoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00016686

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

研究報告

低出生体重児を出産した母親が生活を再構築していく過程で支援に望む思い

永井　智子

抄　録

目的：本研究では，低出生体重児を出産した母親が生活を再構築する過程において，医療者，家族，制度や仕組みに対して，どのような思いをもっていたのか，および支援に望む思いを母親の視点から記述することを目的とした．

方法：研究対象は，出生体重が2,500 g 未満かつ NICU・GCU に入院し，医療的な処置を受けた１歳から就学前の児を育てる母親とした．７人の母親に半構造的インタビューを実施し，質的記述的に分析をした．

結果：低出生体重児の母親が生活を再構築する過程において支援に望む思いは，【かけがえのない子という思いを共有したい】【医療者のような知識がなくても，おいてきぼりにしないでほしい】【一般的な子育て情報ではない自分の子どもに合った情報がほしい】【もう一歩踏みこんでかかわってほしい】【小さく生まれた他児の存在に触れて，成長のイメージをもちたい】【同時に変化する家庭生活を支えてほしい】【小さく生まれたという意識と隣り合わせだからこそ，いまの時間の大切さを共有したい】という７つのテーマが示された．

結論：低出生体重児を育てる母親は，かけがえのない子という思いを周囲と共有し，わが子に合った情報を得ることを望んでいた．さらに，児の経過が順調であっても，母親はさまざまな気がかりをもっており，一歩踏み込んだかかわりを望んでいた．また，母親は生活者としての複数の役割をもっており，変化する家庭生活に対する支援を望んでいた．低出生体重児の母親が望む支援は幅広く，継続的なかかわりを必要とするものであり，母親への効果的な支援のためには，支援者が自身の活動を振り返るのみならず，家族や地域全体を視野に入れた支援を考えることが重要であった．

キーワード：低出生体重児，母親，育児，支援，質的研究

Ⅰ．緒　　言

子どもの出生数は減少を続けているが，出生数に占める低出生体重児の割合は，1970年代から増加し，近年は9.4％前後で推移している（母子衛生研究会，2021）．低出生体重児への救命医療やフォローアップが続けられ（河野，2011），多くの低出生体重児が地域での生活を送っている．しかし，成長の過程で，発達障害を生じる可能性や成人期以降の生活習慣病のリスクが高いことが示されており（中野，2016），母親は子どもの成長や発達へ揺れ動く思いをもちながら，日々育児を行っていることが推察される．

低出生体重児の母親の出産や育児の経験は，予期せぬ突然の出産からはじまり，小さく生まれたわが子の姿に衝撃を受け，保育器によって子どもと隔てられた感覚をもつ（飯塚，2013）．さらに，児の入院が続くことにより，自責の念や無力感に繰り返し苛まれながら，原因探しや児に触れることへの恐怖を感じるとされる（小池，2009）．また，児の経過が順調であっても，母親は退院後の生活を想定した不安があり（木戸ら，2012），退院後も長期にわたり，育児ストレスや社会的孤立が高いことが示されている（田中ら，2011）．一方で，母親は，児に対してかわいいという気持ちや生命の尊さを感じ，授乳や抱っこ等の直接的な接触を通して，母児の愛着が形成される（小池，2009；飯塚，2013）．

低出生体重児の母親に対する支援として，NICU（neonatal intensive care unit；新生児集中治療室）では，ファミリーセンタードケアに基づく看護により，母親の不安軽減，養育能力の向上，家族の関係性強化等の有効性が示され（浅井ら，2015），反応性に乏しい児の要求が母親

受付日：2021年10月８日/受理日：2022年５月17日
目白大学看護学部

に伝わるような看護師の助言（久保ら，2016）や授乳に向けた支援が行われている（田中ら，2012）．また，退院後の支援として，出産病院による電話相談（吉田ら，2005）や，住民に身近な自治体保健師による家庭訪問等が行われている（衛藤ら，2014）．藤田ら（2017）は，子どもの発達特性と母親の心理特性を踏まえ，包括的にかかわる必要性を挙げており，これらの先行研究からも，低出生体重児の母親支援において，包括的かつ個別性の高い支援の重要さが明らかにされている．

また，低出生体重児を育てる母親は，児の発育発達，母親自身の心理状況，家族や親族との関係等のさまざまな状況を抱え，日々の生活を送っている．下村ら（2003）は，対象者を生活と切り離さずにとらえ，その人にとっての生活の意味を考えていく重要性を挙げており，低出生体重児の母親を地域の生活者としてとらえ，支援を考えることが必要である．低出生体重児の母親は，児の出産後に新しい生活を構築しており，その構築の過程を支援するためには，生活者である母親の視点から望む支援を包括的にとらえていくことが重要であるが，先行研究では，医療者側の具体的な支援方法が示されている一方で，母親の視点から望む支援については十分に明らかにされていない．

よって，本研究では，低出生体重児を出産した母親が，生活を再構築する過程において，医療者，家族，制度や仕組みに対して，どのような思いをもっていたのか，および支援に望む思いを母親の視点から記述することを目的とした．

Ⅱ．用語の操作的定義

１．低出生体重児

出生体重が2,500 *g* 未満かつ NICU・GCU（growing care unit；新生児回復室）に入院し，保育器等に入り，医療的な処置を受けた児とした．

２．支　　援

母親の意識や行動を支える周囲からのはたらきかけとし，医師，看護師，助産師，保健師等の専門職が母親の変化を意図して提供するものだけでなく，制度や仕組み，家族等から提供するものも含むこととした．

３．支援に望む思い

母親が周囲からのはたらきかけにこうあってほしいと感じる心の動きとし，母親自身が意識していない潜在的なものも含むこととした．

Ⅲ．研究方法

研究デザインは，質的記述的研究である．

１．研究対象者

低出生体重児を出産した１歳から就学前の児を育てる母親とした．出産・育児を振り返ることのできる期間が経過していること，医療や支援制度に差が生じないよう児の年齢の範囲を設定した．また，母親の身体面・精神面が安定していることを条件とした．入院中の児，日常的に医療的ケアを受けている児の母親は対象外とした．

２．データ収集方法

研究対象者のリクルートでは，機縁法と組織に依頼する方法を並行して行った．機縁法では，研究紹介者から研究対象候補者へ説明文書を渡してもらい，研究対象候補者が研究参加に関心を示した場合は，研究対象候補者から直接研究者へ連絡をする方法とした．組織に依頼する場合は，組織より該当者にパンフレットを渡してもらい，研究対象候補者が直接研究者に連絡をする方法とした．

半構造的インタビューを実施し，出産や育児の経験を通して感じたこと，印象に残っていること，必要だと感じたこと，支援者に望むこと等をきいた．インタビューの平均時間は42分（範囲39～48分）であった．データの収集期間は，2016年11月～2017年11月であった．

３．分析方法

インタビューデータから作成した逐語録を繰り返し読み込み，文脈の意味を意識しながら，母親の思いに焦点を当て，コードを抽出した．コードの意味内容の類似性や差異性に着目し，サブテーマ，テーマへと抽象度を上げた．

メンバーチェッキングは，研究対象者全員に郵便で分析結果を送付し，意見を求めた．メンバーチェッキングは，テーマとサブテーマが抽出された段階で行い，分析結果について同意できるか，意見（自由記載）を求めた．７人中，連絡に返答のあった５人から分析結果の同意を得た．また，メンバーチェッキングの自由記載の意見をもとに，再度，表現等を検討し，内容を精錬した．

Ⅳ．倫理的配慮

研究対象者のリクルートでは，研究対象候補者の参加の可否が研究紹介者にわからない方法をとった．インタビュー当日は，再度，研究に関する説明を行った．研究協力を撤回しても不利益が一切生じないことを保障し，文書による同意を得た．聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号15-081）．

Ⅴ．結　　果

研究協力の同意が得られた７人の母親にインタビューを実施し，結果を分析した．研究対象者（A～G）の属性

表１　母親と児の属性

	A	B	C	D	E	F	G
児の性別	女	男	女	男	女	男	女
在胎週数	37週	30週	34週	25週	25週	36週	36週
出生時体重	1,800 g 台	1,500 g 台	1,900 g 台	500 g 台	800 g 台	1,800 g 台	1,800 g 台
出生順位	第３子 双子の第２子	第１子	第１子	第１子	第２子	第１子	第３子 （第２子死産）
入院期間	１か月	３か月	１か月弱	５か月	４か月	１か月	１か月
行った医療処置	保育器 経管栄養	保育器 酸素療法 心電図	保育器 経管栄養	保育器 人工呼吸器 等	保育器 人工呼吸器 等	保育器 酸素療法， 点滴	保育器 経管栄養
家族構成	父母，兄，双胎の姉，本児	父母，本児，弟	父母，本児，弟	父母，本児	父母，兄，本児	父母，本児	父母，兄，本児
インタビュー時間	45分	40分	40分	41分	48分	40分	39分

表２　低出生体重児を育てる母親が出産後に生活を再構築していく過程で支援に望む思い

テーマ	サブテーマ
かけがえのない子という思いを共有したい	どのような出産であっても，おめでとうと言ってほしい 一つひとつよくなる変化をいっしょに喜んでほしい 希望をいっしょに信じてほしい
医療者のような知識がなくても，おいてきぼりにしないでほしい	子どもに行う治療やケアの理由を教えてほしい 同じ質問でも嫌がらずに答えてほしい 評価的な見方をしないでほしい 素人だけれども，そのレベルに合わせた説明がほしい
一般的な子育て情報ではない自分の子に合った情報がほしい	哺乳力に合わせた母乳/ミルクの与え方を教えてほしい 日々生じるささいな気がかりについてききたい 子どもがこれからどのような経過をたどるのか見通しがほしい
もう一歩踏みこんでかかわってほしい	重症度にかかわらず気にかけてほしい 継続的，長期的に見てほしい 言葉にならない手探りの状態であることをわかってほしい
小さく生まれた他児の存在に触れて，成長のイメージをもちたい	小さく生まれた子を育てた経験がききたい 小さく生まれて元気に育った子の成長に触れたい 自分に合った時期や方法で同じ立場の人とつながる機会がほしい
同時に変化する家庭生活を支えてほしい	健診や入院生活に伴う金銭的な補助がほしい 家事やきょうだいの世話の手伝いがほしい 自分の身体を休めたい
小さく生まれたという意識と隣り合わせだからこそ，いまの時間の大切さを共有したい	自分なりの育児を尊重してほしい いまの生活を大切にしている気持ちを共有したい 一つひとつの成長発達の尊さを感じるからこそ共有したい

については，表１に示した．

低出生体重児の母親が生活を再構築する過程において支援に望む思いは，７つのテーマ，22のサブテーマによって示された（表２）．テーマを【　】，サブテーマを〈　〉で示す．実際の語りは，「　」で示し，個人の特定を避けるため，意味を保持したまま一部に修正を加えた．

１．【かけがえのない子という思いを共有したい】

【かけがえのない子という思いを共有したい】のサブテーマは，〈どのような出産であっても，おめでとうと言ってほしい〉〈一つひとつよくなる変化をいっしょに喜んでほしい〉〈希望をいっしょに信じてほしい〉であった．このテーマは，出産直後から児の退院まで特に強く表れ，医療者や家族に対して示される母親の思いであった．

母親は予期せぬ出産でショックを受けていても，ひとつの大切な命の誕生を喜んでほしいという思いをもち，〈どのような出産であっても，おめでとうと言ってほし

い〉と感じていた．家族をはじめとする周囲からのおめでとうという言葉は，たとえそのときは母親が受け入れることができなくても，時間を経て振り返ったときに，母親の子どもへの思いを支える言葉となっていた．また，医療者に対しても，母親は，子どものかけがえのない命を共に喜び，子どものもつ可能性を信じてほしいという思いをもっていた．母親は，児の状態の安定や発育発達が思うようにいかないからこそ，ささいなことであっても〈一つひとつよくなる変化をいっしょに喜んでほしい〉という思いや，医学的な現実を受け入れつつも子どもの可能性を信じ，〈希望をいっしょに信じてほしい〉という思いをもっていた．

「いま思えばなんですけど，家族が『この子，ちゃんと生まれたんだから，今日，この子の誕生日じゃん．おめでとう，おめでとう』と言ってくれたんです．そのときはもう，おめでとうなんかじゃないよ，みたいな感じで，受け入れられなかったんですけど．いま思えば，確かにおめでとうとだれも言ってくれないと，この子がかわいそうだったから，言ってもらえてよかったなといまは思うんです」

「（看護師が）喉のあれがとれて鼻の管になったとか，鼻の管がとれたとか．何かちょっとした，保育器から出れたとか．そういうのをいっしょに喜んでくれたりすると，本当にすごい嬉しくて励まされました」

2．【医療者のような知識がなくても，おいてきぼりにしないでほしい】

【医療者のような知識がなくても，おいてきぼりにしないでほしい】のサブテーマは，〈子どもに行う治療やケアの理由を教えてほしい〉〈同じ質問でも嫌がらずに答えてほしい〉〈評価的な見方をしないでほしい〉〈素人だけれども，そのレベルに合わせた説明がほしい〉であった．このテーマは，出産直後から児の退院まで特に強く表れ，医療者と母親との関係性によって生じる思いであった．

母親は，〈子どもに行う治療やケアの理由を教えてほしい〉〈同じ質問でも嫌がらずに答えてほしい〉という，子どもを案じ，正確な知識がほしいと願っていた．母親は，医療者に気を遣いながらも〈評価的な見方をしないでほしい〉〈素人だけれども，そのレベルに合わせた説明がほしい〉という，自分たちが理解できる言葉によるていねいな説明を望んでいた．医療者の言動１つひとつが母親の思いに影響しており，母親は出産後の辛い状況のなかで，児のことを思い，医療者に気遣いながら入院生活を送っており，医療者の様子によっては，話しかけるタイミングに気を遣う，十分な説明を受けることができない等の負担を感じていた．

「私が質問することに対して，『だから，言いましたよね』みたいな．何回言えばいいんですかまでは言わないけど，『だから』って言われて．『だから』っていうのが印象的ですね．私の質問に対して，『だから，いま，こう説明しましたよね』みたいな」

「すごい心配性だったから，ちょっと言われるだけで，『えっ，それどういうことだろう』って，すごい調べちゃって．そうすると，なんか怖い病名とか出てきて，『こういう可能性ってありますか』みたいな．看護師さんからしたら，うっとうしい質問を毎日投げかけて．（中略）ちょっとつまずくと，すぐ自分で勝手に調べて，『よく調べていますね』っていつも言われて，嫌がられているなと．それぐらい不安だったんです」

3．【一般的な子育て情報ではない自分の子に合った情報がほしい】

【一般的な子育て情報ではない自分の子に合った情報がほしい】のサブテーマは，〈哺乳力に合わせた母乳/ミルクの与え方を教えてほしい〉〈日々生じるささいな気がかりについてききたい〉〈子どもがこれからどのような経過をたどるのか見通しがほしい〉であった．このテーマは，児の入院中から退院後長期に続き，主に医療者に対して示される母親の思いであった．

母親は，一般的な子育ての情報ではなく，児をみている医療者からの情報を望み，〈日々生じるささいな気がかりについてききたい〉〈子どもがこれからどのような経過をたどるのか見通しがほしい〉という思いをもっていた．この思いは，児のちょっとした変化に関する質問を繰り返すことで表出されていた．特に，母親は〈哺乳力に合わせた母乳/ミルクの与え方を教えてほしい〉という思いをもち，児の哺乳力の弱さや長期入院を経て退院した後の母乳/ミルクの与え方についての相談を希望していた．

「『この子，大丈夫でしょうか』とか，『（酸素の値が）こんなに低くて平気ですか』とか，『無事に育つんですか』とか，なんか，とりあえず毎日同じことをきいていて．でも，みなさん（看護師），嫌な顔ひとつせず，その都度，真摯に答えてくださった．それがすごい救われたなと思います」

「（母乳を）哺乳瓶であげていて，やっぱり，３か月過ぎるころから，ちょっときつくなってきて，もうミルクにしましたね．（上の子が）完全母乳だったのでわかるんですけど，もう，他の人に説明してもわかってもらえないんですけど，力が弱すぎて，もう，ここ，おっぱいを，何か，吸われる感じじゃないんですよね．（中略）母乳で育てたかったけど断念しました」

4．【もう一歩踏みこんでかかわってほしい】

【もう一歩踏みこんでかかわってほしい】のサブテーマは，〈重症度にかかわらず気にかけてほしい〉〈継続的，長期的にみてほしい〉〈言葉にならない手探りの状態であることをわかってほしい〉であった．このテーマは，児の入院中から退院後長期にわたる思いであり，医療者に

対して示される母親の思いであった．

母親は，入院中の児の経過が順調であっても，〈重症度にかかわらず気にかけてほしい〉という思いをもっていた．そして，〈言葉にならない手探りの状態であることをわかってほしい〉と願い，なにを言葉にしてよいかわからない状態であっても，医療者とのかかわりを望んでいた．また，退院後に新しい生活に移行しても，〈継続的，長期的にみてほしい〉という思いをもっており，関係性を断つことなく必要なときに相談できる関係性を望んでいた．

「入院中って，もちろんいろいろお世話してくださいますけど，他にも入院してる赤ちゃんいっぱいいるから，結構放っておかれる時間とかもあったから」

「自分だけで抱えているのもすごい辛くて，話したいんです．話したいけど，家族以外話せる人がいなくて．家族もそんなしょっちゅう，家がすごい近いわけじゃないので話せないし，（中略）．そういうときの不安な気持ちを，常に私はNICUの看護師さんとかに，すごい言っていました」

「すごくいい人（保健師）だったんですけど，やっぱり未熟児について，そんな知識を，すごくもっている人，そんなにたぶんいないのかなと思って．私もだから直接そこへ，疑問なこととか，そういうことをあまりきかなかったんです．なので，そういうのがもし詳しい人だったら，もっときけたかなというのはありますけど」

5．【小さく生まれた他児の存在に触れて，成長のイメージをもちたい】

【小さく生まれた他児の存在に触れて，成長のイメージをもちたい】のサブテーマは，〈小さく生まれた子を育てた経験がききたい〉〈小さく生まれて元気に育った子の成長に触れたい〉〈自分に合った時期や方法で同じ立場の人とつながる機会がほしい〉であった．

このテーマは，出産直後から母親の強い思いとして表れ，児の成長に応じて変化しながらも長期に続く思いであった．母親の身近な他者に対して示される思いであるが，情報が得られない場合は，情報が得られる制度や仕組みの創出を望む思いであった．

母親は，〈小さく生まれた子を育てた経験がききたい〉〈小さく生まれて元気に育った子の成長に触れたい〉と同じ経験をした人からの情報を切に望んでいた．同じ経験をした人が身近にいない場合は，インターネット等から情報を探していた．また，実際に小さく生まれた子が成長し，看護の実習生としてついたことが母親の大きな希望となっていた．また，退院後の生活がはじまると，〈自分に合った時期や方法で同じ立場の人とつながる機会がほしい〉という思いをもち，子どもの発育発達や家族の生活に合わせた緩やかなつながりを望んでいた．

「もっと将来的にこの子が，長い目で見たときに，未熟児で生まれた子が中学生，高校生，大学生になったときに，『こうだよ』とかいう話をききたいというのは，常々思っているんですけど．まずそういう機会がないので，ネットとかでブログとかを書いている人のを見たりするしかなくて．あとは自分でそういう団体を調べて，参加するとかしかないんですけど．なんか途中（団体へ参加すること）が，まだちょっとできてなくて．私が知りたいのは，その部分（未熟児として生まれた子が成長したときの様子）なんですけど」

「小さな赤ちゃんのお母さんの話をききたくて，『こういうふうに育てたよ』とか．もちろん子どもによって違うので，100％同じ経過をたどるわけではないんですけど．なんとなく先が見えない状態のときに，『こうだから，こう大丈夫だった』みたいな話がききたくて．そういうお母さんの会みたいなのが，あるといいなと思っていて．でも病院の看護師さんにきいたら，『そういうのは○○病院では，やっていません』と言われたので，『ああ，ないんだ』と思って．で，地域の保健師さんにもきいたんですけど，やっぱり，そんな会はなくて」

「入院してたときに同じぐらいの低体重児で生まれた子が（看護の）実習生としてついてくれて，それで，すごくそれが安心感につながりました，何かこんな同じぐらいの体重で生まれたのに，立派に成長できるんだって思って．そのころは，どちらかというと，この後に障害が残るんじゃないかとか，そういう不安のほうが大きかったので．実際に見ると安心感が違いました」

6．【同時に変化する家庭生活を支えてほしい】

【同時に変化する家庭生活を支えてほしい】のサブテーマは，〈健診や入院生活に伴う金銭的な補助がほしい〉〈家事やきょうだいの世話の手伝いがほしい〉〈自分の身体を休めたい〉であった．このテーマは，入院中から退院後早期の生活の変化の大きい時期に強く表れ，特定の対象ではなく，家族や身近な他者，制度や仕組み等に対して幅広く示される母親の思いであった．

母親は，〈健診や入院生活に伴う金銭的な補助がほしい〉〈家事やきょうだいの世話の手伝いがほしい〉という，日常生活に深くかかわる制度や仕組みの充実を求めていた．また，産後の身体の回復が十分でないなか，生活を回していくことに体力を使い，〈自分の身体を休めたい〉と感じていた．

「家事との両立が大変でしたね，自分しかやる人がいなかったので，赤ちゃんのことも，家のこともって思うと，そこは結構．家事が，両立が大変っていうのがありました」

「上のお兄ちゃんがちょうど4歳ぐらいだったので，ちょうど自我が芽生えて，いろんなことを理解できはじめていたので．病院に面会に来ると甘えて大泣きとかするんですよね．甘えから，わがまま言いたくて．そうしたら，病室の人からクレームがきてしまって，『子どもを連れてこないでください』って看護師さんに言われてし

まって，面会できなくなっちゃったんですよ．そういった意味では，お兄ちゃんにもほんとにかわいそうな思いというか，大変な思いをさせてしまったなと思って．家族みんな大変でしたね，あのときは」

7．【小さく生まれたという意識と隣り合わせだからこそ，いまの時間の大切さを共有したい】

【小さく生まれたという意識と隣り合わせだからこそ，いまの時間の大切さを共有したい】のサブテーマは，〈自分なりの育児を尊重してほしい〉〈いまの生活を大切にしている気持ちを共有したい〉〈一つひとつの成長発達の尊さを感じるからこそ共有したい〉であった．このテーマは，産後早期ではなく，児と生活をする時間の経過とともに育まれる母親の思いであり，特定の対象ではなく，いっしょに児の成長を見守ってきた家族や医療者に対する思いであった．

母親は，〈自分なりの育児を尊重してほしい〉〈いまの生活を大切にしている気持ちを共有したい〉〈一つひとつの成長発達の尊さを感じるからこそ共有したい〉という，いまをより大切に過ごしていきたいという思いをもっていた．出産からいまを振り返り，大変だったことも含めていまの幸せを実感し，いまの児の状況をいっしょに喜んでほしいと望んでいた．

「１人目は本当に普通に出産ができて，２人目が死産，３人目は未熟児だったので，もうこれ以上なことはない感じ．自分のなかではこれ以上のことはない感じだったんです．なので，自分で納得がいくように育てようと思って．１人目のときみたいに育児書を買ったりとか，あれがいい，これがいいというようなことはもう捨てて．家族４人になって，みんなでいっしょに寝て，みんなでこの子を育てていく．みんなでとにかく笑っていようと」

「食べ物をちゃんと飲み込んでくれるようになったので，それだけでもすごく成長したなっていうのとか．指についたものを口に入れて食べてくれたっていうのは，口の神経と指先の神経がつながってるんだっていう．やっぱり，障害と常に背中合わせというか，気にしながら成長を見てるので．そういう指，ちゃんと神経がつながってるんだっていうことだけでも嬉しいというか．重度の障害がもしかして出るかもしれないって言われていたので，そういった意味では，すごく」

「安心でもあるし，病院来て，楽しみというか，成長これぐらいできましたっていう報告できるのが楽しくなってきました，先生に．先生にも『なにかできることはありましたか』ってきかれると，『これができます』とかって，言えることが楽しみ．普通の子だったら当たり前なんですけど，○○ちゃんはなかなか進まないので」

Ⅵ．考　察

低出生体重児を出産した母親が生活を再構築する過程において支援に望む思いは，特に出産直後から入院中に強く，この時期は，医療者のかかわりに関することが多かった．その後，退院し，児と生活を送るなかで，母親の望む内容は身近な他者や制度や仕組みに広がっていった．また，医療者に望む思いも，出産直後から入院中は，直接的な支援を求める傾向にあったが，時間の経過とともに，児の誕生からの過程を理解している存在として，児の成長を共に見守ってほしいという望みに変化していた．

1．母親の思いに歩み寄ること

低出生体重児を育てる母親は，【かけがえのない子という思いを共有したい】という思いをもち，支援者がその思いを尊重していくことが母親への重要な支援となっていた．NICU への入院は，子どもとの距離感を感じ，母親となった実感をもつことを阻害させる出来事となる一方で，抱っこや授乳により，母親としての実感がわき，母子関係の構築がなされることを示している（飯塚，2013）．また，母親が子どもに触れ撫でていくことを見守り，子どもの表情の変化，かすかな発声音などを伝えていく支援者のかかわりが，母親の自信や満足感につながるとされる（布施ら，2011）．支援者の言葉がけや態度そのものが母親への支援となることが推察され，支援者と母親が同じ目線で，かけがえのない存在としての児の大切さを共有することが，母親の自信や母子の愛着を高めていくことにつながると考える．

しかしながら，田中ら（2011）は，NICU 時には手厚くよかったが，GCU に行くと見放された感じがしたこと，いま考えると普通だが，何気ない言葉かけで傷ついたという母親の思いを挙げており，本研究においても，【医療者のような知識がなくても，おいてきぼりにしないでほしい】【もう一歩踏みこんでかかわってほしい】等の，母親と支援者の間にそれぞれが意識していない思いの行き違いが生じていることが推察された．

Chambliss（1996）は，医療者にとっては日常の物事の流れのうえで起きることが患者にとっては非日常の連続であり，医療者が病院という環境に慣れる過程で，患者の辛さや痛みが認識されにくくなることへの警鐘を鳴らしている．医療者にとっては，児の身体状態が安定している，母親の手技が向上している，家族に力がある等の理由で，かかわる優先度が下がったとしても，母親にとっては常に目をかけてほしい大切なわが子であり，【かけがえのない子という思いを共有したい】という母親の気持ちを尊重しながらかかわることが重要であると考える．

２．母親の求める情報を提供すること

母親は，【一般的な子育て情報ではない自分の子に合った情報がほしい】という思いをもっていた．母親は一般的な育児の情報ではなく，小さく生まれたわが子に関する情報を求め，同じように小さく生まれた児の情報を得ようと知人を広く探し，その範囲で見つからない場合は，インターネット等から情報を得ていた．低出生体重児の母親は，親側の社会的孤立が正期産の母親に比べて有意に高いことが挙げられており（田中ら，2011），わが子に合った情報が得られにくいことも，孤立感を高める要因であることが推察される．母親が求めるときに，児の個別性に応じた情報を提供することが，母親の気持ちの安寧につながると考える．

しかしその一方で，情報を得ることを望みながら，医療者に気を遣う母親の様子が示された．母親が支援者に対して，話しかけるタイミングに気を遣う，十分な説明を受けることができない等の負担が示され，【医療者のような知識がなくても，おいてきぼりにしないでほしい】という思いがあった．岩﨑ら（2015）は，低出生体重児を抱える母親は，予期せぬ体験を通して，自責の念，罪悪感，子どもの不確かさを抱く一方で，順調に成長するわが子に安心と楽しみを感じるアンビバレントな心理状態にいることを示している．母親に医療者とのコミュニケーションにおける新たな負荷をかけず，肯定的な感情を高めていくことができるように，母親が十分に児のことを理解できるような情報提供とその機会の確保が求められる．

３．継続して地域での生活を支える重要性

母親が支援に望む内容は，児と共に地域で暮らすなかで変化しており，母親が安心して新しい生活を構築できるように，支援者は継続的にかかわる必要がある．先行研究では，退院後間もない時期に母親の困難が高まるとされ（茂本ら，2011），NICU から小児科外来に移行する過程でとまどいを感じたり（増井ら，2019），地域の保健師には細かな相談をしなかった母親がいることが示されている（笠井，2016）．本研究においても【もう一歩踏みこんでかかわってほしい】という母親の思いが示され，特に移行期においては，たとえ母親からの相談がなかったとしても，母親は継続したかかわりを希望していることを念頭においてかかわる必要があると考える．永井ら（2016）は，病院のフォローの減少に合わせて地域のフォローとつながり，母親が安心できる居場所を病院から地域へ継続して移行していく重要性を挙げており，本研究の〈自分の身体を休めたい〉〈哺乳力に合わせた母乳/ミルクの与え方を教えてほしい〉〈自分に合った時期や方法で同じ立場の人とつながる機会がほしい〉等を支援していくことは，その実現の一助となると考える．

〈自分の身体を休めたい〉という母親の思いは，早産児の母親を対象とした調査で睡眠時間が６時間以上の母親は育児不安が低いことが示されており（北村ら，2013），母親の休息の重要性は，先行研究と共通していた．また，母乳やミルクの与え方への心配は大きく，先行研究においても，退院後にうまく授乳できなかったことを母親が児の授乳拒否としてとらえた事例が挙げられている（吉川ら，2013）．退院後の母親は，児の授乳方法に関する情報を求めており，児の哺乳力の弱さや長期入院を経て退院した後の〈哺乳力に合わせた母乳/ミルクの与え方を教えてほしい〉という母親の思いに応え，家族の生活状況にあった授乳方法の確立に向けた支援を行っていくことが重要である．

さらに，母親の〈自分に合った時期や方法で同じ立場の人とつながる機会がほしい〉という思いに応えていく必要性が示された．大石ら（2017）は，低出生体重児の親の会を，出産後の辛さや育児に向き合うなかでのさまざまな思いを自分のタイミングで表現し，整理できる場であることを示しており，同じ経験をした母親同士が話す機会の重要性を挙げている．本研究では，母親は同じ経験をした人とのつながりを求めるも，その難しさを感じていた．先行研究でも NICU の看護師の支援で行われる割合の低かったものとして，「退院後の電話訪問」「ホームヘルパー制度の紹介」「低出生体重児の家族の会の紹介」が挙げられ（黒川ら，2017），同じ立場の人とつながる母親の希望が高いにもかかわらず，地域の資源がない，もしくは活用しにくい状況にあることが推察される．低出生体重児を出産した母親が必要なときに希望する資源につながることができるように，地域資源の創出やアクセスできる仕組みづくりが必要である．

低出生体重児を育てる母親が支援に望む思いは，長期にわたるものであり，多様な分野の専門職が協働して取り組むことが必要である．支援者が共通の目標をもち，それぞれの専門性を生かした支援や制度の確立が重要であると考える．

４．研究の限界と今後の課題

本研究では，児の出生体重に幅があり，出生後の入院期間等の経過もさまざまであった．

児の出生体重や母親の属性によって，生活の再構築の過程における母親の支援に望む思いに特徴や相違があるのかを検討していく必要がある．

Ⅶ．結　　論

低出生体重児を出産した母親が生活を再構築する過程において支援に望む思いは，特に出産直後から入院中に強く，この時期は，医療者のかかわりに関することが多かった．出産後から入院中の母親は，【かけがえのない子という思いを共有したい】【医療者のような知識がなくても，おいてきぼりにしないでほしい】という思いをもち，医療者がこれらの思いを母親と同じ目線で共有していく

ことが重要な支援となっていた．また，母親は，出産後から長期にわたり，【一般的な子育て情報ではない自分の子に合った情報がほしい】【小さく生まれた他の児の存在に触れて，成長のイメージをもちたい】という思いをもち，児の成長の過程に合わせて，わが子に合った情報を得ることや同じ立場の人とつながることを望んでいた．

さらに母親は，生活者として複数の役割を担っており，特に出産後から退院後早期にかけて【同時に変化する家庭生活を支えてほしい】という思いをもち，母親の日常生活に深くかかわる制度や仕組みの充実を望んでいた．同時に，母親は医療者に【もう一歩踏みこんでかかわってほしい】という思いをもち，母親が病院から地域での生活に安心して移行していくためには，母親のこの思いに応えていくことが重要であった．

また，母親は，退院後，児と生活を送るなかで，【小さく生まれたという意識と隣り合わせだからこそ，いまの時間の大切さを共有したい】という思いを育んでいた．母親は，出産直後から入院中は，医療者に直接的な支援を求める傾向にあったが，時間の経過とともに，児の成長を共に見守ってほしいという望みに変化していた．

謝辞

インタビューにご協力いただきましたみなさまに深く感謝いたします．本研究は，JSPS 科研費 JP15K20818の助成を受けて行った．利益相反は存在しない．本研究の一部を第28回日本新生児看護学会学術集会で発表をした．

引用文献

浅井宏美，森　明子（2015）：NICU の看護師が認識する家族中心のケア（Family-Centered Care）の利点および促進・阻害要因．*日本看護科学会誌*，35：155-165.

母子衛生研究会（2021）：*母子保健の主なる統計（令和３年刊行）*．53-55，母子衛生研究会，東京.

Chambliss DF（1996）/浅野祐子（2002）：*ケアの向こう側；看護職が直面する道徳的・倫理的矛盾*．19-81，日本看護協会出版会，東京.

衛藤　隆，堤ちはる，岩田　力，他（2014）：未熟児養育医療及び未熟児訪問指導移譲後の市町村母子保健活動の現状調査．*日本子ども家庭総合研究所紀要*，50：195-233.

藤田みどり，西嶋真理子（2017）：極低出生体重児の母親が感じている周囲から支援が得られるという期待感の影響；母性愛着および育児の自己効力感について成熟児との比較から．*日本地域看護学会誌*，20（3）：45-53.

布施和枝，小澤未緒，鈴木智恵子（2011）：タッチケアが早産体験をした母親の心理状態に及ぼす影響に関する臨床研究；NICU・GCU からの子どもの退院を控えた母親を対象に．*小児保健研究*，70（6）：731-736.

飯塚有紀（2013）：NICU への入院を経験した低出生体重児の母親にとっての母子分離と母子再統合という体験．*発達心理学研究*，24（3）：263-272.

岩﨑順子，野嶋佐由美（2015）：乳児を抱える母親の Maternal Confidence および Maternal Confidence を育成する看護介入に関する文献検討．*高知女子大学看護学会誌*，40（2）：125-131.

笠井由美（2016）：低出生体重児の母親への退院後の支援に関する文献検討．*川崎市立看護短期大学紀要*，21(1)：83-91.

木戸裕子，横尾京子，福原里恵，他（2012）：NICU に入院した子どもの退院を決心するまでの母親の経験；入院が長期化しやすい疾患をもつ子どもの母親に焦点をあてて．*日本新生児看護学会誌*，18（2）：10-18.

北村亜希子，神崎訓枝，金川明弘（2013）：低出生体重児の母親がもつ育児不安の要因の検討；クラスター分析を用いたグループ間の比較．*岡山県立大学保健福祉学部紀要*，20（1）：1-9.

小池伝一（2009）：NICU 入院期間中の超低出生体重児の両親の家族形成過程．*日本新生児看護学会誌*，15（1）：20-27.

河野由美（2011）：ハイリスク児のフォローアップ；NICU を退院した子どもたちへの支援．*小児保健研究*，70（2）：134-137.

久保仁美，今井　彩，松﨑奈々子，他（2016）：NICU 看護師の母親に対する退院支援に関する研究動向と課題．*日本小児看護学会誌*，25（3）：84-90.

黒川麻里，松田宣子，山本暁生，他（2017）：NICU 看護師が行っている低出生体重児の親への退院後の生活にむけた支援．*小児保健研究*，76（6）：630-636.

増井洋子，市江和子（2019）：NICU 退院後における低出生体重児の母親の育児と小児外来受診に関する思い．*日本小児看護学会誌*，28：208-213.

永井智子，麻原きよみ（2016）：低出生体重児を育てる母親に対する保健師の支援の意図に関する記述的研究．*日本看護科学会誌*，36：220-228.

中野有也（2016）：低出生体重児の長期予後．*周産期医学*，46：911-913.

大石史香，小嶋秀幹（2017）：低出生体重児の親の会が参加者に提供する心理的支援；会話内容の質的分析．*福岡県立大学心理臨床研究*，９：3-12.

茂本咲子，奈良間美保（2011）：早産で出生した乳児の母親の育児困難感の特徴と関連要因；正期産児の母親との比較より．*日本小児看護会誌*，20（3）：28-35.

下村裕子，河口てるこ，林　優子，他（2003）：看護が捉える「生活者」の視点；対象者理解と行動変容の「かぎ」．*看護研究*，36（3）：199-211.

田中克枝，鈴木千衣，古溝陽子，他（2011）：ハイリスク児をもつ母親の育児ストレスと育児支援の検討；NICU 退院後１年以上経過した早期産低出生体重児について．*弘前医療福祉大学紀要*，２（1）：39-45.

田中利枝，永見桂子（2012）：早産児を出産した母親が母乳育児を通して親役割獲得に向かう過程．*日本助産学会誌*，26（2）：242-255.

吉田裕美子，北野幸子，金澤加津代，他（2005）：育児不安の強い母親への継続看護；NICU 退院児の母親からの電話相談実態調査から．*北日本看護学会誌*，８（1）：33-36.

吉川陽子，平澤恭子，竹下暁子，他（2013）：ハイリスク新生児フォローアップ外来における育児困難を呈した母子への支援．*東京女子医科大学雑誌*，83（臨増）：408-414.

英文抄録

Hope for Support for Mothers of Low Birth Weight Infants in the Process of Rebuilding Their Lives

Tomoko Nagai
Mejiro University, Faculty of Nursing

Purpose：This study aimed to describe the feelings of mothers of low birth weight infants toward their supporters, including medical personnel, family members, systems, and institutions, in the process of rebuilding their lives and their desire for support.

Method：Semi-structured interviews were conducted with seven mothers who have raised low birth weight infant and now their children aged one year to preschool age. of children aged one year to preschool age. The children had weighed less than 2500 *g* at birth and had been admitted to a neonatal intensive care unit（NICU）/growing care unit （GCU）. The data were qualitatively analyzed.

Result：Seven themes that defined participants' hope for support during childbirth and childcare were extracted：【I want to share my feelings about my child being irreplaceable,】【I do not know a lot like medical personnel and require an explanation in simpler terms,】【I want information specific to my child,】【I want my medical personnel to be more involved,】【I want to create an image of growth by comparing information of other low birth weight infants,】 and【I want to share each moment of my experience of giving birth to a low-weight infant.】

Conclusion：Mothers who raised low birth weight infants wanted to share their feelings about their child being irreplaceable and obtain information specific to their child. Moreover, even though their child's progress was on track, they had various concerns and wanted their supporters to be more involved. Further, because mothers play multiple roles, they wanted support to cope with the changes in their family life. Based on the results, it can be said that mothers of low birth weight infants require broad and ongoing involvement of supporters. To provide effective support, supporters must not only look back on their own support but also consider the perspective of the family and the community as a whole.

Key words：low birth weight infants, mothers, childcare, support, qualitative analysis